

水晶岳でたっぷり時間をかけ、冬山候補ルートの湯俣尾根を偵察する。變化に乏しい長い尾根だ。下半分の森林帯を過ぎても後半は大した困難もない様に思う。テントは水晶岳まで進めなければならないだろう。三俣蓮華で上ノ廊下隊を待つ。夕方久し振りに夕立があった。

8月7日 晴
下山。小屋に寄り湯俣へ向う。濁沢出合にて泊る。

8月8日 晴

濁沢出合から大町へ。



2. 小黒部谷・大スバリ沢・黒部別山 (1967年7月)

宮本義海

内蔵ノ助谷出合をB.Cとした黒部別山東面での活動を行なうにあたり、B.C集結を、①片貝川東又谷-平抗乗越-小黒部西谷-小黒部本谷-ハシゴ段乗越、②マヤクボ沢-大スバリ沢-黒四ダム、③小又川右俣-立山-御前谷、④宇奈月より下ノ廊下ルート、の四パーティ分散入山とした。内蔵ノ助谷出合のB.Cは當林署の要請により、途中から剣沢二股に移した結果、黒部別山東面の活動に時間的制約を受け、別山沢右俣、中のガビン沢、大タテガビン沢、広河原中央ルンゼ、左ルンゼに踏跡を残したにとどまった。黒部別山の踏査終了後、櫛平より二隊に別かれて、小黒部谷の中谷と折尾谷を溯行し、片貝川南又谷を下る予定であったが、長雨に会い、3名が折尾谷を溯行、ブナクラ谷を下ったに

とどまつた。

メンバー 杉本健二（4回生） 藤原聰、宮本義海、山内崇、太田英雄（3回生） 勝野優（2回生） 四方立夫、吉村博（1回生） 小野竜弥（OB）

○毛勝岳片貝川東又谷より小黒部谷へ

1967年7月22日～26日 パーティ 宮本義海、小野竜弥

7月22日。昨夜大阪を発ち、早朝魚津駅に降り立つ。東蔵発7時40分、照りつける陽はすでに高く、車中で飲んだビールがすさまじく身体を濡らす。オノマ（9:20）を経て阿部木谷出合（11:15）の小さな木陰で昼食をしたら、二人とも眠ってしまった。北又谷出合（11:50）から谷は小さな屈曲が多くなり、堰堤がつづく。車道は右岸を高くまき、第七堰堤右岸奥に二段の滝をのぞかせて滝倉谷が入る。（13:40）。取入口で車道もつき、谷が北から東へ曲がる地点で溯行に入る（13:55）。これまでの十倍以上の水量の谷となり、ほとんど右岸通しにそこをさかのぼり、つまたところで左岸沿い、やがて左岸に急なモモアセ谷が残雪をかかえて入る頃から、本谷は険悪な様子を見せ始める。本谷左岸モモアセ谷右岸の狭い草の台地に支柱なしのテントを張る（14:35）。黄昏どき、残雪の冷気が深い霧となって谷を流れ、仰ぐ空は夕映えに輝いていた。いつものことながら、入山の日は何故かしら心高ぶる。

23日小鳥の声に眼がさめる。快晴。出発7時30分。南に向かう急な谷を行くと、巨岩が滝を構えている。7mくらいの落差だ。右岸の樹林中を行く。次の滝も同じような規模で、これは左岸を越す。この辺から谷はゴルジュとなつて左岸は草付の絶壁、行く手が南から東南へ曲がるところは逆層の濡れた壁が屏風になり、巨岩が谷をふさいでいる間を二条の水流となって、約20mの滝が落ちている。これが三階棚ノ滝であるが、地形図上には記号が無い。右岸はまったく通れず、左岸は落口ヘトラバースできそうだが、重荷の我々には無理、露岩の少し手前のブッシュを漕いでまいていく（8:00）。この露岩の裏手、つまり滝の落口までの草付は凹角となっていたので、灌木をたよりに沢身におりる（8:30）。谷が再び南に曲がるところで大きな残雪が現われ、作之丞谷が入

る。2mほどステップを刻んで残雪に乗り、約150mさきで北東の方向から開けた曲谷が入る(9:10)。残雪に埋められた本谷は南東の方角に大きく開け、毛勝岳が眼の前になる。左岸に山ぬけが続き、残雪とともに小清水谷、さらに貫之寺谷が入る(10:00)。平杭谷がどれかを検討しながら行動食を食べ、残雪のない小規模な谷に見当をつけて入る。少し行くと谷は水流のあるガレ状のルンゼと、水の涸れた草のルンゼに分かれる。水流のある右俣は地形図上のガレに出ると思われたので左俣に入る。左俣も上で二つに分れるが、こんどは右へ入って行くと、深い草の茂る急斜面になり最後は根曲がり笹の深いヤセ尾根上へ出る(12:05)。しかしその向うは小黒部谷ではなかった。この頃すでに深い霧にまかれて現在地がさだかでなかったが、この小尾根の向こうは最初の右俣のつめになっていて、ガレ状で登れるルートではない。ガレを右に小尾根を登ると、左斜面がゆるやかな灌木の原となって両側の見通しがききそうだ。一瞬の切目に左下を見ると、残雪でいっぱい埋まった長い谷が下っている。磁石で小黒部谷と確かめる。ここが平杭乗越であるか否かはともかく、北東から南西にかけた尾根の左手下に南東の方角へ下っている。下の小尾根の荷を持ってきたときは14時だった。これより小黒部西谷に入る。灌木の下の雪渓に入つて(14:35)下ると、やがて涸滝も現われてくる。約300m下降した頃、左手から同じようなルンゼの合するところで残雪が現われる(15:30)。霧が深く下の状況がわからないので涸谷の一角を整理してねぐらを作る。夜には霧が晴れ大きな月が出た。西谷山から黒部へ落ちる東尾根のシルエットが印象に残る。

24日。カッコーやたくさんの小鳥が合奏し、正面には五竜や鹿島槍が美しい。その右には池の平のコルが遙かに遠く小さい。出発7時25分。雪渓を200m下ると西谷左俣と合する(8:00)。残雪が毛勝岳へとのびる美しい谷だ。来し方を見ると、われわれの下り始めた稜線の右手が一段と低く平杭乗越になっている。このコルへは上の二俣を左へ入るのであろう。広く水量も多くなつた本谷を下ると(9:20)両岸が約10mに狭まり、左岸が壁となって五段ほどの滝になつたところが150mつづく。右岸を巻いたり、水中を下ったりする。滝の上でスリップして滝壺までダイビングしたりした。ようやく岸へ上るとまたド

ポンと音がする。スリップかと問うと宮本はあきらめてとびこんだのだという。これまで平杭乗越を背にした谷は南から東へ曲がり、開けた谷は中谷との出合(10:00)。水量は極度に増える。まもなく両岸が狭まって屈曲をくりかえすようになる。いつも右岸か左岸が壁である。屈曲ごとに飛び石を含めた腰くらいの難かしい徒渉をする。流れは水中の転石に圧縮されてきつい。上流から見てS字形に屈曲したところを最後に、谷はようやく広くなり、小黒部本谷に達する(11:20)。広河原である。本谷下流は見えるかぎり広く、ゆるやかな流れが南の方へ続く河原を時には左右に膝上10m以下で徒渉していくと、左岸に赤谷山からの谷が奥に二段の滝を見せて入ってくる。右岸の奥からは白い沢が流れこむ(13:05)。やがて広い河原につき(13:20)、谷幅は狭まって小さな屈曲が激しく、徒渉も多くなる。右岸 1667.9m 峯に続く南の峯から発する谷が白く光るガレとともにに入る。この谷はガレが続いて地形は複雑なようだ。本谷はいよいよ険悪さを漂わせてくる。このガレ谷出合上流左岸の高みをねぐらにきめる(14:20)。上流の偵察をすませ、小さな焚火を囲んで、濡れた衣服を乾かすとき、遙かなる谷渉の素朴な味わいが幸福感となって胸を打つ。

25日。晴。眼ざめとともに激流のすさまじい音が襲ってくる。出発7時15分。7mくらいの滝が谷を埋め、左岸からは悪いルンゼが落ちてくる。右岸側の急流を涉って右岸沿いに滝をこし(7:40)、上流に向かうと、左岸から奥に滑滝をもった美しい谷が入ってくる。ここからやや行くと(8:00)、両岸とも逆層の壁で囲まれた美しい釜をもつ8mくらいの滝となり、どちらも通れない。右岸の細いルンゼをすこし登って、草付をトラバースし、背が高くて茎の太い草がびっしり茂っているところを、右へと細いルンゼ(いずれも下方で切れている)を三本越す。この辺は谷がゴルジュ状となり、水流は激しいようだがよく見透せない。次にやや広いルンゼに出会い、これについて本流へ100mほど下降する(9:20)。2199.1m 地点からの谷が右岸に合流する。本谷は500mさきで右へ曲がる。しばらくゆくと5mの滝が二条に分れているところで、右岸を越える。平凡になつた転石の谷を行くと、地形図上の山ぬけが左岸へ現

われ、やがて右岸から谷が入る。ここからは谷は屈曲して先は見えないが、谷いっぱい残雪を踏んで行く（10:30）。上部に残雪を見せて赤ハゲの谷が入る。残雪の上を行くが、その下にはどうやら滝もありそうだし両岸とも壁になっている。続いて白ハゲの谷が細い尾根末端をへだてて入る。この谷も上部に残雪が豊かだ。本谷の残雪はここで切れ、出合から少し上がると池の平の小屋が正面に見えてくる（11:00）。広く平凡な谷を300mほど行くと、ふたたび残雪を踏む。右岸から細いルンゼが入ってしばらくで（11:40）、残雪がポッカリと切れて滝が現われた。この滝の上は残雪が埋め、谷は右へ曲がりこむ。雪の上から右岸の露岸とブッシュを20m登って右にトラバースすると、最近ケモノか人が高く巻いた形跡がある。それについて200m行くと、大窓谷の大雪渓が見えた。右岸仙人山から発する谷の出合へ下る（12:00）。大窓谷と本谷の出合付近は雪に埋まりさらにつめていくと、池ノ平山から出る複雑なルンゼは三本に分れ、真中のルンゼはさらに二条に分れている。池ノ平小屋が霧の間に見えたのにねらいをつけて真中のルンゼの右から入る。雪の消えたルンゼはガレ場になるので左の小尾根をつめると、小黒部銅山の廃道に出、右へ少し行くと小屋へ出た（14:15）。右の小尾根は小屋へ続いていた。北股谷を見おろすと池とテントが点々としてそこはもう下界であった。

26日。出発7:00 二股8:00 ハシゴ段乗越10:20 内蔵ノ助谷出合B. C 12:35。 こうして小黒部谷は終った。黒部上ノ廊下に比して豪快さに欠けるが、人煙のないことはそれ以上で、天候に恵まれ、われわれは小鳥のように谷から谷を渡った。 （記 小野）

○大スバリ沢 メンバー 山内崇・勝野優

7月24日 快晴。 信濃大町にて勝野と落ち合う。タクシーにて大出に向かい、西沢正勝氏宅に寄って現地連絡本部を依頼し、ベース集結後使用の装備等を預かってもらってから、扇沢のトンネル口まで入る。人通りの多い針ノ木の雪渓の途中からマヤクボ沢に入る。はじめは左岸を行き、急に雪渓が細くなるあたりから、比較的に岩の安定している右岸に移る。傾斜の急なマヤクボ沢の

側面を這い松などをつかんで高度を上げてゆくと、突然左手にマヤクボのカールが視界に飛び込んで来た。美しいお花畠である。まるで黄色いジュータンを敷き詰めた様で、一瞬ではあったが自分のこれから行くべきところを忘れさせた。

マヤクボのコルは割合に広い所であった。眼下に見る黒部湖の大きさに驚き、対岸に見る立山連峰に慰められながら岩の影にツェルトを拡げ、石の枕に今宵一夜の夢を結ぶ。

タイム　扇沢(7:10) — マヤクボ沢出合(10:15) — マヤクボのコル(13:15)

25日 晴、夜一時小雨。 雪を溶かして朝食を作る。大スバリ岳の頂上から見るスバリ西稜は細い岩稜であった。それを右に左にまわりこみながらの下りであるが、触れる岩はどれもこれもみな浮き石であり、一つとして安定していない。岩は脆いし、また引っ張ればすぐに抜ける。しかもスバリ岳の西面、及び北西面は滝谷にも匹敵する様な岩の殿堂であり、見事なフェイスがいくつもある。大きな落石を何度も起しながら、ナイフエッジをザイルなしで行動した。

下り始めてから約一時間で小さな岩峰に遭遇する。（これは多分P3であろうかと思われる）。左手からまわり込んで行けば通過出来そうであったが、右側の幅約1メートルのガリを、ロックハーケン二本、捨て縄二本を使って、ザックを別におろしてのアブザイレン。後続の勝野のシルエットが空に浮び一種の感動を憶える。下り立ったところは高度約2460メートル付近であった。

これより下部のスバリ西稜は幅も広くなり、赤色土の中に這い松が現れ、樹林帯に続いている様子なので、そこから大スバリ沢側のルンゼに入ることにする。上部は雪渓が残っていたので、右岸の狭くて浅いラントクルフトの中を下る。最初はグリセードを試みたが重荷の為失敗する。雪渓が終ったあたりは大きな岩が散乱しており、ルンゼの幅は約5～6メートル。

落石を避けるために横列で下ったが、次第に小さな丸石の堆積に変り、足を置くたびに石が流れる。右側から一本のルンゼ（これは多分二峰と三峰間のルンゼと思われる。）が入って来るあたりで、ついに小さな岩雪崩を起して山内が2メートル程流された。何ともなかつたが、振り仰ぐと左右の岩稜の側壁に

圧倒され、岩の牢獄にとじこめられたようで、下りはじめたところは小さな窓のようであった。そして赤沢岳西尾根の猫ノ耳と呼ばれるピークは霧に見え隠れしていた。ルンゼは次第に広くなり、広いところで 15~17 メートル、狭いところで 7~8 メートルで灌木帯に入り、次第に流れる石の層は薄くなってきた。ガレ場を終って灌木帯に入る。薄暗くて湿ったトンネルと言った感じのルンゼを半時間も下って行くと、突然それが消えた。周囲に見えるのは、ルンゼの突当りの小高いところや、左右の急斜面に枝を伸ばしているダケカンバだけであった。ルンゼが下るに従って消える筈がない、と不信になりながら突当たりまで進んでみると、小さな落口の上をダケカンバの葉が隠した涸滝が左側に落ちていた。近くのダケカンバをピンにしてアブザイレンで下る。滝は上部でオーバーハングしていて幅約 2 メートル、高さ約 15 メートル、空中懸垂であった。そのすぐ下も約 4 メートルの小さな滝となっていたので、岩にザイルを回してピンとし、アブザイレンで下った。

しばらく行くと水音が聞こえ、左側の小さなルンゼから水が流れ落ちていた。地下足袋に替えて、ここで昼食を取る。水は途中で伏流となり、大スバリ沢に入る少し手前で再び現われていた。途中 5 メートル程の滑滝があったので、その中央を下る。

大スバリ沢との出合は川原の様な感じで、ひらけていた。沢は明るく、それまでの暗さとは異なり、岩も黄味がかった色をしている。水量もそんなに多くない大スバリ沢を右岸に、左岩にと道を求めながら、約 40 分程下って行くと、約 40 メートルの滝に出会った。はるか下を水がきらめきながら流れている。手持ちのザイルでは届きそうもなく、左岸は垂壁に近く苔生している。右岸も上部でハングし、下部は垂壁となっていたが、川床より 5 メートル程上の右岸に針金の様な物の見える幅約 30 センチ程のバンドがあった。近付いて見るとやはりそれは径 5 ミリ程の針金で、切株に固定してあった。また踏跡も見え、木を組んだ橋もあった。多分ダム工事のための沢止めの時の工作でもあったろう。その踏跡を行くと、それは途中で消えてしまったので、ブッシュの中に入る。

沢から離れて右へ右へと回り込んで行くと、視界が開けて右側に大きな壁が現われ、その下を幅2メートル程のゆるいルンゼが大スバリ沢に向っていた。踏跡はここでまったく消えており、適当なピバークサイトも見付からないので、ルンゼをつたって大スバリ沢に戻る。ルンゼと大スバリ沢の出合からは高巻いた滝も、沢の曲り具合から影になって見えなかった。出合から30分程下って、幅7メートル、高さ5メートルの滑滝左岸上部にピバークサイトを決め、食事の用意や薪を集めていると空模様が怪しくなって来た。兎に角、食事を終り、疲労していたので焚き火を止めて眠ることにしたが、夜半に雨がぱらつき始めたので、大急ぎで荷をまとめてさらに高台の藪の中に逃げ込んだ。この夜はほとんど眠らなかったが、水量は少しも増さなかった。

タイム 出発(6:25) - 大スバリ岳(6:35) - 下降開始(6:55) - 雪渓下(9:25) - 二段の滝(11:30) - 大スバリ沢出合(14:20) - 四〇米滝(15:00) - ピバークサイト(16:20)

26日 快晴。 昨夜の不眠から出発がおくれた。ピバークサイトの滑滝は左岸を下る。湖岸に出てそそぐ水の中に岩魚の影を見、心をなごめる。すぐ右手のダムに続く斜面に取りつく。ブッシュばかりではなく、ノコギリで切った大木が沢山ころがっている急斜面をこの切株を目標にして、湖水面から20~100メートル程の斜面を上り下りしながら黒四ダムに向う。鹿のものらしい糞をしばしば見たが獸道でもないらしく、ブッシュにつかまりながら苦闘して行く。対岸に見える立派な道がたまらなく羨ましい。

昼過ぎにダムを見る。その手前に西尾根から湖に落ちこんでいる二段の小さな岩稜があるのでその中間を通る。途中に急なルンゼが7~8本あったが、岩を、或いは草を擱んでトラバースする。その内の何本かは湖までさえぎるものもなく70度ぐらいの角度で落ちていた。最後の岩稜を越えると、ダムまではダイナマイトで爆破した幅約120メートルのガレ場に出た。どうにもヘズリはむずかしいと判断したので、他の方法を考えたが、兎に角ピバークの用意をする。何か期待を欺かれた様な気持になる。又自分達の事前調査が不足していたのを痛感する。運よく通りかかった舟に乗せてもらうことが出来てダムま

で着いたが、勝野にとっても己の微力が腹立たしかったであろう。

ダムの下にビバークして翌朝遅く B.C. 予定地の内蔵ノ助谷出合に向った。
タイム：出発（8:00）—湖岸（9:20）—ダム手前ガレ場（18:00）—ダム（18:30）—ダム下（19:30）（記：山内）

○黒部別山東面 7月29日～8月8日

我々は、今合宿第2計画として、現在開拓されつつある黒部別山の東面における登攀を計画した。

黒部別山は、山自体非常に急峻であり特にその東面は多くの支尾根を派生している。そしてその尾根の間にルンゼがくいこんでいるが、すべてのルンゼは急峻であり、高差は 1000m 以上ある。又、夏においては、一部のルンゼ以外では水を得ることはできず、かなりのブッシュにも悩まされなければならない。幸いにも今年は頂上付近にわずかの雪田をみつけたのでそれを利用したが、そこに行くまでに水不足のビヴァークを強いられてしまった。

以上のように予想はしていたものの、かなり苦しい登攀に終始した計画であった。

我々が今回トレースしたのは、別山沢右俣、中のガビン沢、大タテガビン沢の右俣左俣の出合まで、広河原中央ルンゼ石俣、左俣の各ルートである。

下山ルートとしては、P5 ルンゼ、及び立稜経由ハシゴ段乗越を用いた。

さらに別山沢左俣へもパーティを出したが、沢の入口の雪渓の状態が非常に悪く追い返されてしまった。

尚、第2計画中には新人のトレーニングをも含めていたが、これについては、剣岳三ノ窓の雪渓にての雪上訓練、剣縦走等を行なった。

最後に B.C. について。最初我々は内蔵之助谷出合にテントを張っていたが、2～3日後撤去を命ぜられてしまった。合宿前の調査不足によるものであるが、しかたなく二股まで B.C. を移動したため、アプローチ等、計画に非常に不利になったのは残念であった。

(1) 別山沢右俣 (メンバー 宮本・藤原)

7月29日晴。下ノ廊下を下って白竜峡に入る手前、左から黒部川本流に流れ込んでいる沢が別山沢である。

沢に入ってすぐに雪渓が現われたが、かなり不安定な状態だったので、右岸のガレている壁をへつっている。一度左俣の雪渓上に懸垂下降をした後、左俣をトラヴァースして中尾根の末端にとりつき、再度微妙なトラヴァースを行ない右俣へ懸垂下降をする。最初は単調な登りが続いたが、やがて雪渓が現れる。雪の切れた所で右岸の壁にうつりへつって行く。雪はズタズタに切れかなり悪い。2度程のシャワークライムの後右岸よりの小ルンゼに入り込む。そこを少し登ってすぐに再びトラヴァースして本沢にもどる。そこは非常に急なガレ場で、ルート中最悪の登りであった。そこを通過して急な草付を登り別山コルに立つ。そこからは必死でブッシュを漕いでいったが、その日は水不足に悩まされながらブッシュの中で寝るはめに陥る。

7月30日晴。朝から再びブッシュ漕ぎ。しかしようやくハシゴ段乗越への道をみつけた。

コースタイム

7月29日 B.C発6:30 別山沢出合7:40 別山沢右俣着9:15 小ルンゼに入る13:30 別山コル16:30 ピヴァーク19:00

7月30日 起床5:50 ピヴァーク地発6:30 ハシゴ段乗越9:50

(2) 中のガビン沢 (メンバー 杉本・吉村)

7月29日 晴。中のガビン沢は、第2尾根と第3尾根の間に入り込んでいる、急峻な沢である。

取付の20mの涸滝は右岸より取りついていく。ここからは連続した涸滝で、快適なフリークライミング。第2尾根フランケを右に見ながら、沢は扇状に広がる。

左よりにつめると壁の中央に出る。右肩の洞穴テラスにトラヴァースしてブッシュを漕いで尾根に出ると第3尾根P1であった。ここでピヴァーク。

7月30日 晴。 P1と南尾根のコルよりトラヴァースして P5の下に出る。40mの懸垂で P5ルンゼに入る。急な草付を下った滝のところから再び 40mの懸垂を行う。後 20分程で内蔵助谷に下り立つ。

コースタイム

7月29日 取付 7:00 第3尾根ビヴァーク 18:00

7月30日 出発 6:00 南尾根 P5 7:00 内蔵助谷 10:20

(3) 広河原中央ルンゼ (メンバー 宮本・山内)

8月7日 晴。 広河原中央ルンゼは、その名の通り別山カベ尾根から、広河原の左岸におちているルンゼである。

最初は水流のあるガレを行く。F1(8m)、F2(40m)、F3(30m)、を共にフリークライムで快適に行く。

それより細いガレ場を100m程行くとF4(50m)がありこれを直登して落口に出る。F5はチムニー状の滝で、左カンテを行く。それからガレ場を50m程行き右手の尾根に逃げるが、出口はかぶり気味でルート中一番悪い。

下降は尾根通しで行う。途中大きなギャップがあり北側のルンゼを下りトラヴァースして尾根に戻る。

F3に降り、そこより懸垂下降をまじえて取付点に戻る。

コースタイム

8月7日 取付 7:30 F4落口 8:30 尾根に出る 9:40 取付 11:55